

特集

「子どものことば」を育むとは——親子の視点から

緒言 川上 郁雄

本号の特集「「子どものことば」を育むとは——親子の視点から」は、前号13号の特集「子どもの「ことばの実践」を考える」のテーマを引き継ぐもので、特に今回は「親子」に焦点化し、企画された。

本特集の趣旨を改めて説明しておこう。近年、国内外の複数言語環境で成長する子どもが増加している。その子どもたちの成長過程には、「胎教」を含む親（父・母）とのやりとりが深く関わる。五感（耳・目・舌・鼻・皮膚）からの情報、身体的な触れ合い、空間的移動、学びの環境、反抗期と進路、生き方・キャリアの選択を経て、成人となり社会に出て、親になり、高齢期に至るまで、子どもの人生に親子の関係性が深く影響していると考えられる。では、その中で「子どものことば」を育むという営みは、国内外の移動の空間的広がりや人生全体の時間的視野の中にどのように位置づくのだろうか。「子どものことば」を育む営みの意味づけは、親子の立場によっても異なるものであろう。日本語習得に限らず、複数言語環境で学び成長する子どもの「ことばを育む」「ことばを学ぶ」営みの意味を、親子の関係性を視点に、多くの方々と共に考えることを願って企画された。

今回の特集には一般公募から多数の論考が投稿された。その論考を、編集委員会で厳正に審査した結果、「研究論文」「実践報告」「エッセイ」が各1本選ばれ、ラインアップが組まれた。以下に、各論考が提示している論点、内容を簡潔に紹介しよう。

中家晶瑛の「研究論文」は、「中国帰国者家族」として1980年代後半に中国から日本にきた若者が日本で子どもを産み育てた「ニューカマー一家4名」の中国語の継承語教育／継承語学習への認識と親子関係に焦点化した論考である。一家は日本で日本語を使用して

生活してきたが、子どもたちに中国語を学ばせるために成長期に中国へ短期留学させた。帰国後、日本語使用に戻った子どもたちは大学生となり、英語圏の大学へ短期留学する。子育てが終わった両親、成人した子どもたちそれぞれへのインタビュー調査をもとに、継承語としての中国語に対する親子それぞれの認識のずれ、親子関係の変遷と動態の様相を明らかにした。これまでの継承語教育／継承語学習の意味づけを問い返す貴重な研究と言えよう。

次の松岡里奈・藤井瑞葉・川合友紀子・常見千絵の「実践報告」は、タイにおいて長年に渡り実践を重ねてきた「複言語・複文化ワークショップ」から生まれてきた「言語マップ活動」の意義について考察した論考である。この活動を通じて、タイで暮らす親子が日本語、タイ語など複数言語に触れて子どもを育てること、また子どもが成長することの意味づけや意義を、自ら気づいていく様子が活写されている。「関係性マップ」や「言語ポートレート」なども用いてワークショップ参加者が自らの複言語性の意味を振り返る機会を継続的に提供し続ける実践主体の成長も示唆される実践例である。国内外の実践者に参考となる実践であろう。

最後の子安美美的「エッセイ」は、日本の大学院で日本語教育を学び、海外赴任する夫とともにタイへ渡り、子どもを出産後、タイで日本語、英語、タイ語の複数言語環境で10年間子育てをした自身の経験を綴っている。海外で初めての子どもを育てる母親の思いや子どもの言語選択についての願いや葛藤、そして何より子どもへの愛情が基本となることを子どもの成長とともに確信していく様子が丁寧に描かれたエッセイである。本特集のテーマである、複数言語環境で育つ「子どものことば」は、親や教師や周囲の人々と子どもとの「愛着関係の中で」こそ育まれるというメッセージは今世界各地で子育てをしている人や実践者に大いに参考になるだろう。

本特集が、「移動する子ども」や「移動する家族」に関心を持つ方々、何より現在複数言語環境で成長している子どもたちの「ことばの実践」に関わる方々の参考になれば幸いである。

(編集委員会委員長)